

深井中央中だより

令和6年1月特別号

◎明るいあいさつと笑顔あふれる

◎授業中、落ち着いた雰囲気

◎掃除が行き届き、花いっぱい

◎生徒が安心して過ごせる

『元気な学校』

『静かな学校』

『きれいな学校』

『安全な学校』



－1995年1月17日火曜日 午前5時46分52秒－

校長 至 孝也

淡路島北部を震源として発生し、6434 人もの尊い命が亡くなり、未曾有の大災害を引き起こした兵庫県南部地震から、今日で 29 年を迎えました。「阪神・淡路大震災」という言葉は、正確に言うと“この地震によって生じた災害”をさす呼称であり、地震の正式名称は「平成7年(1995年)兵庫県南部地震」ですが、ここでは地震自体をさして「阪神淡路大震災」と表記することとします。

毎年、阪神淡路大震災が起こった1月17日に、神戸市中央区の東遊園地において行われる追悼行事「1.17 のつどい」に、私が初めて参列したのは8年前でした。以降、コロナ禍によって開催規模が縮小された年以外は、毎年参列し続けています。今年も参列し、早朝から東遊園地に訪れたたくさんの方々とともに、地震発生時刻の午前5時46分に、静かに祈りを捧げました。

黙祷後、遺族代表として追悼の詞を述べた鈴木佑一さんは、震災で家族との時計の針が止まり、兄と生き別れて心を閉ざし、何かをがむしゃらに探して生きる中、見守り、助けてくれ、支えてくれる方々と出会い、その人たちに感謝して恩返しするために生きていくことを決意したと話されていました。生き埋めになった5歳の自分を助けてくれた人々に今も感謝を伝える鈴木さんの首には、震災で亡くなったお母さんの形見のマフラーが巻かれていました。

この1.17 のつどいでは、震災に改めて思いを馳せるきっかけになるようにと、公募で選ばれた文字を「1.17」の文字とともに灯籠で描く行事が行われます。灯籠の文字が、「子どもたちに“伝える”」という、私が就く教師の使命とも重なる「伝」だった年もあり、灯籠に浮かび上がる文字が特に心に響いたこともありました。報道でご存知の方もいらっしゃると思いますが、今年の文字は「ともに」でした。

灯籠の文字の募集期間中に能登半島地震が発生したため、「ともに寄り添い助け合う」の意味を込めてこの文字を挙げた応募が多かったそうです。

人は、一人では生きていけません。ともに生きる。ともに支え合う。ともに必要とし、ともに分かち合い、ともに思う。亡くなった方に思いを寄せながら、辛い中生きている方もいらっしゃるでしょう。1.17 のつどいに集う人々も、被災の有無や居住地等にかかわらず、たとえ知らない者同士であっても「ともに祈る仲間」です。つどいに行けなくても、阪神淡路大震災を思い出し哀悼する気持ちを持つ人は皆、ともに祈る仲間と言えます。4000本の灯籠に灯されたろうそくの火が、気温2℃の神戸につどう人々を、そしてともに祈る全ての人々をあたたかく包んでくれた1月17日の朝となったように思います。

ここで皆さんに、ひとつ、想像してほしいことがあります。それは、もし今、関西を直撃する大地震がきたらどうすべきかを、想像して考えてほしいのです。上から落ちてくる物がないか確認する。非常口の場所を把握しておく。緊急時の連絡の取り方や集合場所を、家族や大切な人と話し

合って決めておく。こういった、「災害が起こっていなくてもできるシミュレーション」を、日頃から重ねておくことが大事です。

また、自分で自分を守る「自助」の努力はもちろんしなければなりません。災害時こそ、周りの人たちで助け合う「共助」の心を持つことが重要です。

阪神淡路大震災の際、倒壊家屋に多数の被災者が閉じこめられました。消防に救助を要請しようにも電話はつながらず、消火活動が追いつかないほどの件数の火災が発生している上に道路は大渋滞で、消防の救助活動は難航を極めました。結局、消防が救助できたのは全体の2割。残りの8割の方々は、近隣住民の方達によって助け出されたとの記録が残っています。自身も被災している近所の人々が、ともに力を合わせて、助け出したのです。

阪神淡路大震災から 29 年。今年は元日から地震が続いていますが、こんな1月だからこそ、自助と共助を意識して、周りの人と防災の話をしてもらえればと思います。避けることができない災害には、「できる時に、できることを、できるだけやって備える」しかありません。しかし、防災を身近に考えることが、まず大切です。

何があっても前を向いて、ともに生きていくために。

